

老健は中間施設としての役割を果たしているか？

北村裕史<sup>1)</sup> 元井光夫<sup>1)</sup> 風晴俊之<sup>2)</sup> 美原恵里<sup>3)</sup>

- 1) 公益財団法人脳血管研究所介護老人保健施設アルボースリハビリテーション科
- 2) 公益財団法人脳血管研究所美原記念病院リハビリテーション科
- 3) 公益財団法人脳血管研究所介護老人保健施設アルボース施設長

[はじめに]

2025年に向け地域包括ケアシステムの構築が推進されており、介護老人保健施設(老健)は地域包括ケアシステムの中核拠点としての役割が期待されている。老健は、リハビリテーション(リハビリ)機能、リハビリを含めた包括的ケアサービスの提供、在宅復帰を支援、在宅生活を支援する施設としての役割が求められている。老健は、さまざまな疾病、入所目的の利用者が存在し老健入所に至るまでの経路としては、自宅および病院から入所する利用者など多様である。自宅から老健へ入所する利用者は、家族の仕事の都合や介護負担の軽減の場合も多くレスパイトケアを目的として老健を利用し、在宅生活を継続している。一方、病院から直接老健に入所する利用者は、十分な機能回復が得られず在宅復帰が困難であったため、リハビリの継続、動作能力の改善を希望し、老健を利用している。しかし、リハビリによる動作能力の改善には限界があり、本人、家族が能力向上を期待しても応えることができないケースも存在する。そこで、当施設が、老健に求められる在宅復帰という中間施設としての役割を果たしているかについて検討した。

[対象・方法]

平成27年度、当施設に病院から直接入所し、その後、在宅転帰に至った利用者50人(男性21人・女性29人、年齢 $83.2 \pm 8.6$ 歳、要介護度 $3.5 \pm 1.3$ )を対象とした。入所目的を動作能力向上、介護不安、家族都合、サービス調整待ち、その他に5分類した。その中で動作能力向上を目的とした利用者について、入所前の入院時の病棟が急性期病棟(急性期群)か、回復期病棟(回復期群)かにより2群に分け、入所期間、入所時FIM運動項目、退所時FIM運動項目について調査した。なお、入所時FIM運動項目と退所時FIM運動項目について、Wilcoxonの符号付き順位和検定を行い比較した。また算出されたFIM利得を入所期間で除しFIM利得/日を求めた。

[結果]

入所目的は、動作能力向上が27人(54.0%)と最も多く、次いで介護不安が10人(20.0%)であり、家族都合が7人(14.0%)、サービス調整待ちが4人(8.0%)、その他が2人(4.0%)であった。動作能力向上を目的にした利用者のうち、急性期病棟からの入所者(急性期群)は15人で、回復期病棟からの入所者(回復期群)は12人であった。

急性期群の平均入所期間は $118.2 \pm 57.2$ 日であり、入所時FIM運動項目 $43.0 \pm 18.8$ 、退所時FIM運動項目 $51.7 \pm 20.4$ と有意な改善を認めた( $p < 0.05$ )。FIM利得は $8.7 \pm 9.8$ でありFIM利得/日は $0.088 \pm 0.091$ であった。回復期群においては平均入所期間 $142.7 \pm 71.8$ 日であり、

入所時FIM運動項目 $48.2 \pm 19.3$ 、退所時FIM運動項目は $55.0 \pm 19.5$ と有意な改善を認めた ( $p < 0.05$ )。FIM利得は $6.8 \pm 5.0$ であり、FIM利得/日は $0.057 \pm 0.049$ であった。

[考察]

病院から老健に入所する利用者の目的は、動作能力向上が過半数を占めていた。このことは、少しでもADL向上が図られ、介護負担を軽減し、在宅生活を継続したいと望む利用者が少なくないことを示している。当施設におけるFIM利得/日は低く必ずしも効率的とは言えないが、急性期および回復期から入所した利用者ともに明らかな動作能力の改善が認められ、在宅転帰できる可能性を確認することができた。しかし、診療報酬制度において急性期病棟はリハビリ機能の義務付けがなく、疾患別リハビリ料により対象疾患は制限されているため、入院中に廃用症候群を来すリスクがある。また回復期病棟では入院期間に制限があり、必要十分なりハビリが提供されないまま退院する可能性もある。

また、在宅復帰を妨げる要因として、利用者家族の介護不安が大きいことも挙げられる。この問題の解決のため、当施設では、利用者家族に対し面会時や面会時以外でも相談員、ケアマネージャーを通じて、本人の状態の報告、リハビリの進捗状況などの情報伝達を行っている。さらに、家族が介護に対し不安を感じていることを把握し、必要に応じて家屋環境の調整や介助方法の助言などを繰り返し実施している。これらの取り組みが、家族の介護不安の軽減、在宅転帰の受け入れに結びついている可能性も考えられる。

老健が中間施設として十分に機能するためには、病院で十分なりハビリを受けられなかった患者を積極的に受け入れ必要なりハビリを提供するとともに、家族に対する適切な援助を行うことが重要である。

[まとめ]

病院から当施設に入所した利用者の利用目的を聴取し、動作能力向上目的で入所した利用者のFIMの変化を調査した。FIM利得/日は低いものの老健で適切なりハビリを提供することで動作能力を改善し在宅復帰できる可能性を確認することができた。

老健が中間施設としての役割を果たすために利用者へ必要なりハビリを実施するとともに家族に対する適切な援助を行うことが重要である。

病院から老健に動作能力向上目的で入所した利用者のFIMの変化を調査した。利用者のADLは向上しており、老健で適切なりハビリを提供することが中間施設としての役割を果たす上で有用であることが示された。

発表形式：口演

カテゴリ1群：101入所

カテゴリ2群：205データのある比較・検討

カテゴリ3群：356 その他リハビリ関連